

## 道博協ニュース

## 第 9 号

発行所 昭和54年3月31日  
 北海道博物館協会(事務局)  
 札幌市中央区宮ケ丘3の1  
 札幌市円山動物園内  
 (011)-621-1426

第十八回北海道  
博物館大会せまる

本協会の第十七回富良野大会は、開催市はじめ会員並びに関係者各位の熱意と協力により、種々の課題を提起しながら成功裡に終えることができました。この大会の成果をふまえて昭和五十四年度の第十八回大会は、六月二十八日、二十九日の二日間北海道立近代美術館を開催館として開催されることになっていますが、その概要が三月二十日の役員会において決定しましたのでお知らせします。

第十八回大会のテーマは、「地方の時代における博物館のあり方をさぐる」と表され、第一日目は、受付(午前八時四十分から九時十五分まで)、開会式(午前九時十五分から同四十五分まで)に引続いて午前九時四十五分から「地図のたのしみ」で日本エッセイスト賞を受賞いたしました北大理学部教授の堀淳一氏が「北の風土と地図」と題して特別講演を行ないます。同氏の講演の中には、別な角度から見た博物館活動に役立つものが多々あるものと思われまます。引続いて、午前十一時十五分から分科会が行なわ

ので、別途事務局から各会員あて通知いたしております。

助言者

第一分科会

北海道開拓記念館

副館長 村松 宗作氏

日本動物園水族館協会

会 友 川合豊太郎氏

旭川市立旭川郷土博物館

館 長 松井 恒幸氏

第二分科会

北海道教育委員会

未 定

北海道立近代美術館

普及課長 笹野尚明氏

網走市立郷土博物館

館 長 米村 哲英氏

分科会終了後は、午後四時から総会を行ない、当協会の事業計画等の審議の外、本年は役員の改選期でありますので、新しい会長及び役員が選任されます。午後六時から会場を移して、参加者が一同に会して懇親会が催されます。参加者は、旧交を温め、大会等で出せないような問題を時間の許すかぎり開陳されることを期待しています。

二日目は、午前九時から同じ会場で全体会議が行なわれ、両分科会での討論内容が報告され、全体でさらに討論される予定であります。午前十時からは、館園長会議と学芸職員等講習会が二つの会場に分かれて開かれます。館園長会議は、本大会において始めて行なわれるものであります。前年度大会の席上提案された事項の具体化であり、一方学芸職員等講習会は、学芸職員から強く要望されている鉄道の保存処理方法を実地に研修しようとするものであります。午前十一時からは施設見学で、市内には多くの見学したい施設がありますが、今回は時間の都合上雪印乳業歴史資料館が予定されています。同館は、産業博物館的展示内容と思われまますが、自館の展示等にも大いに参考になるものと考えられます。施設見学の後、同館で昼食をとり、二日間の日程を終えることになっていきます。

会員及び学芸職員等各位に  
おいては、自館業務の遂行上  
何かと多忙のことと思いま  
すが、本協会の益々の発展の  
ため、多数の参加を期待して  
います。

## 第十七回北海道博物館大会を かえりみて

網走市立郷土博物館

館長 米村 哲 英

第十七回北海道博物館大会  
は、昭和五十三年六月二十九  
三十日の両日、富良野市文化  
会館を会場に道内博物館園か  
ら多数の参加者を迎え盛會裡  
に終了しました。

参加者の一員として、大会  
の反省をふくめ思いついた二  
・三のことを述べてみたい。  
一、大会運営について

会場の設営、大会日程など  
富良野市と大会事務局の連繫  
がよく立派に運ばれたことは  
開催地関係者の熱心を協力と  
あたたかい配慮のたまものと  
深く感謝したい。

大会日程に地元に関連した  
記念講演がなかった とは少  
々淋しかった。また全道の博  
物館園関係者が一堂に会して  
の研究討議の場に、地元の市  
民団体も積極的に参加して、  
博物館園の認識を深めてもら

えることであるが、過去の分  
科会は施設紹介程度のものが  
主で内容的に乏しく、参加者  
は十分な満足を得られぬこと  
が多かったが、今回の発表者  
全員は現場での実践体験から  
論を展開し、問題を提起して  
討論の俎上に乗せ討議内容を  
深めさせたことは大きな成果  
であった。

若手学芸員が進んで発表し  
研究的内容で論を進めていた  
ことは印象的であり、さらに  
この傾向を強めてほしいもの  
と感じた。

助言者のアドバイスも適切  
で、討議内容を一層深める上  
で大いに貢献していた。

四 全体会議について  
分科会報告は大会参加者の  
大多数が両分科会に参加した  
い気持があると思うので、報  
告事項は事前に充分整理し、  
明確にしてほしい、

五 視察について  
富良野市の目玉産業である  
ワイン工場・縄文中期の先史  
文化を包蔵する鳥沼公園の視  
察設定は地元関係者の配慮が  
暖かく感じられ参加者に頗る  
好評であった。視察途中の車

中で参加者間のコミュニケーションが深められたことも大きな成果であった。  
今後の北海道博物館協会の  
一層の発展のため、反省をふ

## 博物館の資料情報

### システム化への提言

北海道開拓記念館

学芸部長 北川 芳 男

博物館では、資料情報の的確な収集整理が急務であり、  
重要であるとされている。

受身の立場から積極化への切替えが必要とされる今日、  
自館が保有している資料あるいは他館が保有している資  
料的確に把握することは、館園活動の基本と思われる。

このような観点から北海道開拓記念館、学芸部長、北  
川芳男氏に提言していただきました。

最近、期せずして二つの国 精力的な活動を行ない、わが  
立博物館関係者から同じよう 団を代表する博物館であり、  
な相談をもちかけられた。一 昭和五十三年度にはコンピュ  
つは大阪の民博の佐々木先生 ーターも導入された。したが  
で、他は歴史博準備室長の井 って資料情報の収集と管理、  
上先生からである。 サービスのシステム化が急が  
二つとも資料情報の収集と れるわけであり、その成果が  
センター的役割を果たすために 期待される。一方、歴博は現  
はどんな方法がよいか、どこ 在建設準備中で開館後の体制  
までできるだろうか検討して を早めに考えておきたいとい  
みたいということである。博 うことである。いざれにして  
物館関係者としては大変よろ もそのようなシステムが完成  
こばしいことだと思ふ。衆知 し、地方の館が自由に利用で  
のように、民博は開館以来、 きることになれば、大したも

のである。だが、この事業は簡単にできるものではない。

大きな問題は、各地域の資料情報を如何に収集するかである。一九七五年の日博協で編集した博物館白書によると全国の博物館でまあまあ自分のところの資料整理はできて

いるとした博物館は全体の三分の一程度でしかない。尤も、資料の整理、分類の仕事は時間と労力そして経費が必要になってくる。そればかりでなく、分類体系の問題や資料名、用語の統一など細部にわたる検討がおこなわれなければならぬ。開拓記念館もその意味では、おはずかしが、資料の整理はできていない。もちろん、資料台帳や一応のカードはできてはいるが、カード内容(分類的位置づけ、記載など)が完備していないのである。したがって館が所蔵している資料の体系的把握もできない。そんな状態では、資料情報の提供もできないことになる。

尤も、コンピュータ利用による資料情報管理とデータベースシステムは、博物館の

近代化に大きな役割を果たすであろう。しかし、わが国の博物館の現状は、それ以前の問題があまりにも多すぎる。それは、毎年の道博協大会の討議のなかにもいろいろ出されている。

博物館活動という多くの人は、すぐ展示であり、普及活動であると考えがちである。だが、博物館が博物館であるための基本的条件は資料なのであり、これこそ他の社会教育施設と異なる点であるが、同時に、一般、とくに行政サイドには理解されないうところ

でもある。いざにせよ、資料情報の交換を行なう以前の仕事、つまり資料の整理分類について、道内各館の実態調査的なものを手掛りに、はじめて行く必要があるのではなからうか。時間はかかるだろうが、博物館、資料館であるためにはさけられないことであるし。道博協としてもまずやらなければならぬものがある。

## 新加入館園紹介

最近本協会に入会しました滝上町郷土館と、現会員です。新設オープンした斜理町立知床博物館を紹介します。

### 滝上町郷土館

滝上町は、本道東部に位置し、約七十年前の明治末期に渚滑川の上流に沿って山間地に発達した町です。

開拓当時は、寒冷地での生活体験のない本州から移住した人々の手によって町づくりが進められ、厳しい自然との苦難な生活でした。現在の滝上町の基礎とでもいべき歴史がめまぐるしく変化する今日、過去における地域の歴史を、残されている資料をとおりして当時を理解し、明日の地域生活のあり方を知るための重要な体験として、また、後世に伝え残す財産として、昭和四十年頃より公民館活動として資料の収集展示が行なわれ、昭和四十四年に郷土史研究会が結成され、これが母

体となって昭和四十七年に郷土資料館が設置されると同時に町民の善意が寄せられ郷土館建設に向けて新しい活動に動き出しました。昭和五十三年の町開基七十年記念施設として建設されたものです。

新しい郷土館は、旧資料館で果し得なかつたテーマを設定し、教育的、文化的、郷土史的展示構想を入れ、視聴覚的に配慮して、み力ある郷土館とし、位置も町の将来的発展を考慮して溪谷公園内に自然景観にふさわしいものとししました。

規模は、本館<sup>83</sup>㎡、S L館<sup>4</sup>㎡、計<sup>69</sup>㎡の鉄骨造り平屋建てですが、道内的に珍しいS Lドームを併設し、大任を果したS L(96型)が今ここに静かなる余生を送っています。展示に当っての基本構想については、北海道開拓記念館の指導助言のもとに立案し、農林業の町にふさわしく展示も木と人間のかかわりを主テーマに八つのコーナーに別れています。

玄関ロビーには、町が誇る桜草の全景写真をはじめ、町

内、町周辺の模型、町産木の各種材鑑、大バノラマは、伐木造材、運材と動感をあらわし森林軌道のミニチュアも展示しています。館内中央には開拓当時の民家を移設し生活道具を配置し、その様は当時をしのぶ感がみられ、来館者に大変好評を博しています。

郷土館の運営については、運営委員会(委員十名)を設け館長の諮問、事業達成に協力を願ひ、運営の充実を図っています。女子職員一名の配置であり、開館まもないため、現在は、来館者の案内、整理整頓のみで館独自の活動は皆無です。入館料は大人50円、小中高校生は20円です。年間を通して開館していますが、毎週月曜日、祝祭日、年末年始は休館にしています。昨年五月二十八日より一般に開放していますが、十二月末日までの入館者は八、一三九名(一日平均四六名)であり、昭和五十四年度は一人を目標にPRをして参りたいと思っています。

なお、旧資料館に数多くの資料を保管してありますので

近く「別館兼収蔵庫」を併設して充実した郷土館づくりを目指して努力しています。

(郷土館長 三浦 重雄)  
所在地 紋別郡滝上町元町  
電話 (015829) 3499

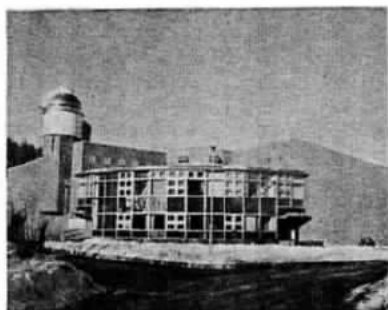


### 斜里町立知床博物館

当館は、斜里町開基百年を記念して、町民公園の一面に総工費一億八千万円で建設され、昭和五十三年十二月二十八日に開館しました。厳しい知床半島の自然と、そこにはぐくまれた人間の歴史とを語る資料の収集、保存、展示を行ない、明日の斜里町を考える場としての利用を図って

おります。

博物館の外形は知床半島に生息しているオジロワシをモデルにしています。一階には「知床へのいざない」「知床半島の生いたち」「知床の夜明け」「氷海の民族」「神々の大地」「開拓の頃」「百年の塔」の各コーナーが設けられ、現在の斜里町に至るまでの歴史を再現すべく、地質、考古、民俗資料を紹介しています。「百年の塔」の周囲には、漁業、農業、林業、商業、鉱工業、そして暮らしなど、過去百年の様々な、血と汗にまみれた人々の証を展示しています。また、約四分間のビデオ映像「厳しい自然とともに斜里の農漁業」で、現在の



斜里町を紹介しております。

二階には「知床の葉」「知床の樹木」「オジロワシとオオワシ」「知床の鳥」「知床の森林の動物」「知床の草原の動物」「知床の海の動物」の各コーナーが設けられており、自然界での生息状態を再現させたジオラマ展示に力を注いでいます。特に、オジロワシとオオワシは共に天然記念物に指定されており、はく製標本と写真によって、その多様な生態を再現しています。また、鳥の声の音声ボックスを設け、鳥の名前、姿と声に対応できるように配慮をしています。研修室では三面マルチスライド「知床の人と自然」を映像してあり、知床半島の自然の雄大さと、人との関わり合い、そしてその自然保護を訴えています。

当博物館は、教育普及活動の一環として「野鳥観察会」「史跡探訪」等の博物館講座を月約三回開いています。また、天体ドームも備えており「星の観察会」も催しています。そして、知床半島の自然と文化に関する総合的な調査

研究活動を各年ごとに、テーマを設定して推し進めています。調査研究結果を「博物館研究報告」や「郷土学習シリーズ」にまとめています。また、町民との交流を深める目的で、トビツク的なニュースや資料紹介、行事案内を載せた「博物館のひろば」を年四回発行しています。

現在、鹿、オオワシ、タヌキといった動物を飼育していますが、当博物館の近くには自然林が残っており、今後、鳥、葉を呼ぶべく整備し、生きた自然を体験学習できるよう計画しています。まだ開館して数ヶ月しかたっていないが、今後予想される多種多様な住民要求に有機的に対応すべく、地域博物館としての機能の充実化を目指しています。

所在地 斜里郡斜里町本町四  
電話 (01522) 311256

### 会員の異動

加入  
○団体 滝上町郷土館

紋別郡滝上町元町  
○個人 遠田 恭 行

○賛助 (株) 五番館  
札幌市中央区北四条西  
三丁目

退会

○個人 畠山 俊雄

### 事務局より

北国の長い冬も終りを告げ、待望の春の訪れとなりました。会員各位におかれましては、新年度を迎え何かとお忙しい毎日のことと思います。

昭和五十三年度の最後の事業でありました、学芸職員等研修会は、去る二月二十三日盛會裡に終えることができました。この研修会の運営にあられた、学芸職員部会関係者のご尽力に感謝しております。

道博協ニュースの発行のため、会員諸氏から原稿を提出いただいておりますが、今後もどんなことでも結構ですから、どしどし寄稿下さいませよう、ご協力をお願いいたします。

本年度の最大の事業であり、第十八回北海道博物館大会を控え、事務局も鋭意努力して行きますので、お気付きの点は遠慮なくご一報下さい。